

松江市方言「ナル」の可視性による使い分けについて

千葉 軒士 (中部大学)

要旨

島根県松江市方言の「ナル」は、発話者と対象との親密さを示すために、友人・知人を対象に用いられる待遇表現である。ただし、この場合、最も親しいと考えられる家族と親しくないはずの他人がともにナルの使用対象外となってしまう。この事象に、さらにそもそも待遇表現が有する性質も加えて考えると、ナルの使い分けには[家族 - 選択的不使用 (意図的に使用を避ける) / 友人・知人・使用 / 他人・非使用 (そもそも使用が適当ではない)]の3種があることがわかる。

また、発話者から対象が不可視の場合には対象が家族であってもナルが用いられる。これは対象との心的距離と物理的距離が密接な関係にあるためである。音声でしか状況を判断できない不可視 (物理的距離の判別が不可能) の状況では、ナルを使わないことが、選択的不使用と非使用という親疎の両極にあたる形のどちらによるものかが判別しづらい。よって、不可視の場合には、ナルを積極的に使用することで、実態とは多少異なるものの、親しい対象である (心的距離が近い) ことを明示することを優先していると考えられる。

1. はじめに

島根県松江市では、例えば (1) のように、文末にナルを伴う表現が観察される。

(1) ドコ イキナルカ (どこへ行きますか)

このナルは、従来の研究で敬語とされてきたものであるが、その詳細な記述は未だなされていなかった。そこで千葉(2009)は、島根県松江市で行った面接調査¹の結果を資料とし、ナルの用法・接続関係・待遇差を考察し、またナルには可視性による使い分けが存在することを指摘した。本発表はそのナルの可視性について、さらに考察を深めることを目的とする。

2. 先行研究

島根県の方言について、広戸(1950)は敬語という章でナルについて以下のように記述する。

この形は出雲では八束郡や、松江市、能義郡等東部出雲に用いられる。(中略)目上に対する言葉とは言えない。(p. 109)

この記述は、ナルは目上に対して使用される言葉ではないことを指摘している。また神部(1982)は、ナルは敬意の高い「ナサル」の略形として用いられているとしている。

ついで、「ナサル」関係の敬語がとりあげられる。出雲では「ナハル」が多い。(中略)

¹ 今回の調査は、言語形成期以前から現在地で生活する話者 A・B と、高校卒業後、進学に伴い東京に移住した話者 C を対象とし、面接調査を行った。

A 1947 年生まれ 男性 / B 1947 年生まれ 女性 / C 1946 年生まれ 女性

前述の「～シャル・サッシャル」の上位にあり、敬意は高い。(中略)敬意の低下した「～シャル」の後を補うべく、新形の「ナハル」が採用されたと考えることができよう。(中略)出雲・石見の両域に、「ナサル」の略形、「ナル」がある。(pp. 227-228)²

このように、広戸と神部はナルについて異なる見解を示す。この両者の記述のみでは、ナルが待遇表現³としてどのように用いられているのかが明確ではない。

この先行研究を踏まえ、千葉(2009)では、当該方言の待遇表現として、ツシャル・ナルを考察した。結果、ツシャルは話し手が相手を丁寧さを示すべき対象と判断した際に選択され、ナルは話し手が相手を親しさを感じる対象と判断した際に選択されること、つまり、ツシャルは上下関係の表示のため、ナルは親疎の表示のためにそれぞれ使用されることを確認した。

3. ナルについて

本節では、ナルの使用状況を確認する。以下の例文は、[対象=聞き手]となる場合である。

(2) 対象本人に行き先を尋ねる際 「どこへ行きますか」

- ・対象が近所の仲の良い同輩の場合

ドコ イキナルカ

- ・対象があまり関わりの無い人の場合

ドコ イクカ

まず(2)の例を確認しよう。「どこへ行くのか」という内容を伝達する際、話し手が聞き手との親密度を(つまり相手を)どのように判断するかで、ナルを接続するか否かが決まる。ここで、聞き手を親しい対象と判断すると、動詞にナルが後続する。逆に聞き手を親しくない判断した場合、ナルは現れない。このナルは、対象が目上の場合には用いられず⁴、話し手が同輩や目下の聞き手を親しい対象であると判断した際に使用される。よって(2)では、近所の同輩が話し手にとって親しい相手だとする判断の下で、ナルが現われている。

また [対象=聞き手]だけでなく、(3)のように[対象≠聞き手]の場合、つまり会話の参与者ではなく、話題となっているだけの相手との親密度を表示するためにもナルは用いられる。

(3) 近所の仲の良い同輩である〇〇さんの行き先を、〇〇さん以外の人間に尋ねる際

「(少し先を歩いている〇〇さんは)どこに行くのか」

ドコ イキナルカ

この例から、ナルは話し手と対象との親密度を示すものだとわかる。よって、ナルの位置づけを考える際は、先行研究で指摘されていた上下関係のみでなく、親密度も考慮する必要がある

² 今回の調査では、インフォーマントの3人すべてがナハルは使用しないと解答した。

³ 本発表においては、待遇表現という言葉を用い、「話し手から対象に対する何らかの意識を明示する指標」として捉える。その理由など、詳細については後に述べる。

⁴ 親しい対象でも、その対象が話し手より目上の場合は、その上下関係の表示の方が優先されるため、ナルではなくツシャルが用いられる。詳細は千葉(2009)を参照されたい。

ると言える。ナルは、話し手が自身と対象との関係を、親密度の高低といった点でどう判断するかで使用の選択がなされることがわかる。親密度と上下関係のどちらか一面ではなく、その二面で使用が判断されることから、脚注3でも触れたように、敬語やボライトネスという語ではなく、それらを包括した待遇表現としてナルを捉え、以下、論を展開していく。また、そこに表されている話し手の意図を「(何らかの)意識の明示」と表現する。

しかし、一概に上述のようにも言い切れない。当該方言話者は、基本的にナルを親密度を表すために使用するとしているが、話し手にとって極めて親しいと思われるはずの家族を対象にすると、ナルは基本的には使用されなくなる⁵。

(2) 家族を対象とし、その家族の行き先を尋ねる際 「どこへ行きますか」

○ ドコ イクカ

△ ドコ イキナルカ

決して文法的に使用できなくはないが、当該方言話者はその使用に違和感を覚えるため、基本的にナルを家族間で用いない。ナルの事象には、[ナルの有/無]という2種しかないが、ここで[ナルの無]の対象が、極めて親しいと考えられる家族と、あまり関わりの無い親しくない対象の2種あることが問題となる。親密度で使い分けがなされている以上、対極にある2種の対象を同一理由により、つまり同一の判断を有する対象として、[ナルの無]によって扱っているとは考えにくい。よって、[ナルの無]は、それ1つの事象が1つの判断を示しているのではなく、実際は1つの事象が2種の判断(2種の対象)を負っていると考えるのが妥当だろう。まとめると、ナルは話し手が親しいと感じる対象に使用され、話し手が親しくない判断した対象には使用されない。加えてナルは親しい対象であってもそれが家族である場合には使用されない。ナルには、[ナルの有/無]という2種の事象しかないが、それが実際には3種の判断([ナルの有]に1種、[ナルの無]に2種)に分かれているのである。

4. ナルの可視性について

前節では基本的なナルの使用状況を示し、家族に対してナルは使わないと述べた。だが、ある条件の下ではナルが家族間でも使用される。その条件とは、対象が見えないこと=不可視であり、ナルには[可視/不可視]の観点による使い分けがあると言える。以下の例を見よう。

(4) 出張で出かけている父について母に尋ねる際

オトーサン ドコ イキナツカネ (お父さんはどこに行ったのか)

父の不在時に、父が話題となる会話がなされた際、ナルはこのように現れる。つまり、通常目前にいる父に対して用いられることのないナルが、この場合は使用されるのである。そもそも先述したように、家族間でナルは用いない。だが、ここでは今話題の中心である父との親密度を示すためにナルが使用されている。

ここで、この問題が人称に関わるのではないか、つまり(4)では聞き手である母との間の親密

⁵ ある条件の下では家族を対象としてナルを使用する場合もある。これについては後述する。

度の表示のためにナルが使用されているのではないかという懸念が浮かぶ。他方言では、丹羽(1982)が、愛知県稲沢市で使用される・aQse・が、聞き手以外の第三者に向けられる話し手の敬意を示すものと指摘している。このように人称に応じた待遇表現を有する方言もあるだろうが、当該方言のナルは決して人称の問題ではない。次の例を見よう。

(5) 父の風呂が長く、その父の状態を心配して風呂の外から父に話しかける場合

オトーサン マダ オフロ オーナルカネ (お風呂にまだいるのか)

これは発話時に扉の向こうにいる=不可視の父に対する問いかけとなるが、この際にもナルは現れる。(4)と異なり対象に直接話しかけていることから、不可視の際に家族間に現れるナルは、人称によるものではないことがわかる。

ここでナルの詳細な使い分けについてまとめよう。以下の表1から表3では、対象を、上下関係の面から[目上/同輩/目下]に、また親密度の面から[家族/友人・知人/他人]⁶に分類する。まずは、対象が目前にいる場合のナルの使い分けを示す。

表1 対象が目前にいる場合(対象=聞き手・対象≠聞き手)

対象	家族	友人・知人	他人
目上	×	×	×
同輩	×	○	×
目下	×	○	×

以上のように、ナルは通常同輩及び目下の友人・知人に対して使用される。しかし、その親密度を示す対象が目前にいない際、ナルの使い分けは以下のように変化する。

表2 対象が目前にいない場合(対象=聞き手・対象≠聞き手)

対象	家族	友人・知人	他人
目上	○	×	×
同輩	×	○	×
目下	×	○	×

上のように、会話の場にはいない目上の家族を話題にする(つまり目上の家族が第三者として会話に関与する)際にも、ナルは使われる。これは単に、発話時に話し手と対象が同環境に存在しているかどうかという、物理的距離に還元できる問題ではない。話し手から見える少し離れた場所にいる対象にナルを使う際、その使い分けは以下ようになる。

⁶ ここでは、上下関係を、対象の年齢・立場・経歴・地位・階級などが話し手と比してどう位置づけられるかで、それぞれ[目上/同輩/目下]と分類した。また、親密度を分類する際に用いている[知人]という言葉は、話し手とある程度継続的・反復的な関わりを持つ対象を意味し、面識がある程度対象ならば、その対象は他人に分類することとする。さらに[家族]は、基本的に血縁関係がある対象を指すが、話し手が家族同様に思っている対象(例えば恋人など)も、ここに含まれる。以下、ここでの分類に用いた語・概念に基づき、論を進める。

表 3 対象が少し(見える範囲で)離れている場合(対象=聞き手・対象≠聞き手)

対象	家族	友人・知人	他人
目上	×	×	×
同輩	×	○	×
目下	×	○	×

このように、対象が見える範囲で離れている際のナルの使い分けは、表1と全く同様になる。物理的距離に関わらず、話し手から見える範囲にいる家族に対してナルは使用されない。

つまり、ナルは本来話し手にとって親しい対象=友人・知人に限り使用されるものであったが、話題となる(対象≠聞き手となる)対象が話し手にとって不可視かつ話し手より目上の家族である場合には、家族間であっても使用されるのである。家族を対象とした時のみ不可視時のナルの使い方が変化することからも、やはり[ナルの無]は2種の判断を表しており、ナルの使用には親密度による3種の判断があると言えるだろう。

5. 日本語における待遇表現の性質から見たナルの選択的不使用・積極的使用

確かにナルには、2種ではなく3種の親密度による判断があることがこれまでの議論より明らかになった。だが、なぜ3種の内、最も話し手と対象との間の親密度が低い他人と、話し手と対象との親密度が極めて高いと考えられる家族に対して、[ナルの無]という同様の事象を取るのか。また、なぜそれが可視性を差し挟むと(もっと言うなれば、対象が見えない)様相を異にするのか。その理由を本節では考察する。そのためにまず、日本語における待遇表現を見ていこう。

5. 1. 日本語における待遇表現

日本語の待遇表現に関する研究は、敬語・ポライトネスなど様々な側面から数多くなされているが、滝浦(2005)はそれらの先行研究を踏まえた上で、話し手のとる視点とそこから生まれる対象までの心的距離を表示することが敬語の本質であり、その使用はそのつど話し手の定める視点が生む心的距離によって変化するものだとしている。さらに滝浦は、敬語を使用しないという事象について次のように述べている。

敬語は距離化の表現であり、距離化とは、対象人物を“遠くに置くこと”によってその領域の侵犯を回避する、ネガティブ・ポライトネスの一形態である。(中略)それゆえ、敬語使用の反対面にある敬語の不使用が、対象人物を“遠くに置かないこと”によって領域の共有を表現する、ポジティブ・ポライトネスのストラテジーとなり得る。(中略)ポライトネスの視界の中で、敬語の使用が〈距離〉の問題に還元されるというとき、そのことはまた、敬語の不使用も同様に〈距離〉の問題であることを含意する。それゆえ、敬語(使用)の語用論は、敬語不使用の語用論と表裏をなすものであり、両者は同時に成立するのである。(pp. 21-22)

つまり、待遇表現を使用することが話し手から対象への何らかの意識を明示するのであれば、使用しないこともまた、意識の明示になり得るということである。また、その根幹には心的距離があり、それは話し手が視点を定めることで初めて生まれるものなのである。

5. 2. ナルの選択的不使用

5. 1. を踏まえ、ここではナルの2種の事象が3種の判断を表す理由を見ていこう。そもそも、待遇表現は心的距離を生む、つまり対象と離れていることを示すことで、対象との衝突を避けようとするものである。それは滝浦(2005)が用いた、「ネガティブ・ポライトネス」という言葉がよく示している。しかし、3. で論じたように、当該方言におけるナルは親密度を示す指標であり、決して消極的な観点から用いられるものではない。これは、一般的な待遇表現と異なる、ナルの特徴である。では、他の待遇表現と同様に、対象との間に心的距離を生む消極的な側面から使用されるものとして、ナルを捉えられないだろうか。

仮に今、ナルが話し手から友人・知人に対する「ネガティブ・ポライトネス」を表すものだとしよう。すると、必然的にナルは対象と離れていることを示すものとなる。では、このナルが使用されない対象、つまり友人・知人よりも話し手との間に心的距離が無い対象とは何か。そこで、家族が現れる。対象が家族の場合、そこに心的距離はほぼ無いため、当然待遇表現は現れない。それに対し、家族と比較した場合、心的距離がある友人・知人にナルが使用されるのである。ただし、友人・知人との間にある心的距離は、家族と比べれば大きいものの、他人との間に生まれるそれよりはるかに小さい。友人・知人に使用されていることからわかるように、ここでのナルは心的距離を表すために消極的な理由から使われていたとしても、その心的距離は[近い]という範囲でしかない。[心的距離ほぼ無し]に対する[近い]には消極性が感じられるが、[遠い]に対する[近い]はどうだろうか。そこにあるのはむしろ積極的な関わりである。その[近い/遠い]の意識差におけるナルの積極的な解釈の方が強くなり、[ナルの有=親しい/ナルの無=親しくない]と当該方言話者の認識が変化したのではなかろうか。そもそも家族が親密であり、心的距離がほぼ無いことはわかりきったことであるため、話し手が特段そこに意識を向ける必要が無いとも言える。このような面も手伝い、ナルがポジティブな意味を有して使われるようになったと捉えることも不可能ではなかろう。本来は[家族/友人・知人]の対立において対象との心的距離があることを示すために使われていたナルが、やがて[友人・知人/他人]という対立において対象との近さを示す指標に変化した。ナルを、他の待遇表現同様にネガティブ・ポライトネスだと仮に捉えた場合、それがなぜポジティブな側面を有して使われるようになったのか、そしてなぜ[ナルの有/無]という2種の事象で、対象に対する3種の判断を表すのかは、このように説明できるだろう。

さて、ここからは現在のナルの実態、つまり、ナルがそもそも親密度の高さを表示する指標であるという事実在即し、ナルの使用に際しての判断が3種となる理由を見ていこう。ナルが話し手と対象の心的距離が近いことを表すのなら、当然ナルが現れないことは話し手と対象との心的距離が遠いことを表すことになる。ナルには[ナルの有/無]の2種の事象しかないが、この場合、心的距離がほぼ無い家族にどのような事象を当てはめるのが適当か。そこで重要なのが、5. 1. で触れた「待遇表現を使用しないことによる意識の明示」である。ナルは、近いとはいえない心的距離があることを表すものであり、話し手と対象の間に心的距離が無いとはいえない

い表現である。近い=距離が少なからずあるという表現を、心的距離がほぼ無い家族に対して用いることは、実態にそぐわない不適当な表現となってしまう。極論を言えば、本来無いものを言葉で示すことで、対象及び会話の参与者と話し手との間に誤解を生みかねない。そこで、心的距離を感じさせないための配慮として、あえてナルを使用しない形を取るののである。滝浦(2005)が言うところの敬語の不使用(=使用セズ)に当たるが、発表者は当該方言の実情により即した形で表すために、これを敬語の「選択的不使用(選択的に使用セズ=意図をもって、使用を回避した場合)」と捉え、一方他人を対象にした発話でナルを使用しないことを「非使用(使用スルニアラズ=そもそも、使用することが不適当な場合)」と定義したい。なぜなら、当該方言では以下のような表現も観察されるからである。

(6) すでにいつもより多量の酒を飲んだにも関わらずまだ飲みたがる父に娘が
マダ ノミナルカ (まだ飲むのか)

ここで対象とされているのは間違いなく家族、つまり話し手との間に心的距離がほぼ無い人だが、ナルが使用されている。当該方言において、このような表現は対象に批判的な意識を向ける場合に用いられる。つまり、本来心的距離がほぼ無い人との間にあえて心的距離を作りたい場合、対象を自分から突き放して捉えたい場合に用いられるのである。(6)が示すように、家族間でナルを使用することができないことはない。しかし、通常ナルは家族間では現れない。本来使用できるものが使用されないのは、意識的に使用を避けているからだろう。つまり、他人に対する[ナルの無]と、家族に対する[ナルの無]では、そこに込められた話し手の対象に対する意識が異なるのである。事象としてはともに[ナルの無]という形をとるが、他人に対しては、そもそも近くないために使えない(非使用)のであり、家族に対しては、使えるけれどもそれが適当では無いためにあえて使わない(選択的不使用)のである。形にしてしまえば同じであるが、そこに含まれる意図は明らかに異なる。よって、発表者はこれを[家族/友人・知人/他人]という判断に対する、ナルの[選択的不使用/使用/非使用]とし、ナルを、親密度による3種の判断に対応する3種の意識の明示だと捉えたい。

では逆になぜ、他人にナルは使えないのか。ここまでの議論で、ナルは親密度の高さを表すが、それは同時に近いとはいえない心的距離があることを表しているため、心的距離がほぼ無い家族間では使わないこと、心的距離がほぼ無いにも関わらず、あるとすることに抵抗があるため、友人・知人よりも親密度が高いはずであろう家族に対し、ナルの使用を選択的に回避することで実態に即した親密度を表示していると述べた。つまり、程度の差はあれ、「親しい」範疇に属する対象を[家族/友人・知人]として判断を分けるのは、心的距離の有無によるものだけということになる。ここで今度は、[友人・知人/他人]を比べてみよう。すると[家族/友人・知人]の場合とは反対になり、親密度に関しては有無という大きな差があるのに対し、心的距離に関しては、程度の差はあれ、どちらも有であるとわかる。[家族/友人・知人]の場合と正反対になっているのなら、ここでは、心的距離があることを表示するために、どちらにもナルを使用してもいいはずである。しかし、ここでそうならないこと、つまりナルが選択的不使用ではなく非使用になる理由も、やはり待遇表現の性質で説明できる。5. 1. で見たように、待遇表現の根底には、話し手と対象との心的距離の表示がある。そして、心的距離は視点を定めることで初めて生まれるものである。では、他人に対して、話し手が適切な視点を定めて距離を測るだろう

か。そもそも待遇表現は、話し手が対象に何らかの意識を表示したいがために現れる。だが、その対象が話し手にとってこれといった関係も無い相手だった場合、その対象が自分にとってどんな存在であるかという意識も起きず、またそのような意識を有して明示すること自体もさほど意味を持たない。つまり、そのような対象には特段気を遣う必要性が無いことになる。対象に何らかの意識を明示する必要性が無ければ、当然視点を定める必要性も無く、また視点が定まらなければ心的距離も生まれにくい。家族でも友人・知人でもないということから、心的距離があり、近くないだろうことだけはわかるが、それがどれだけのものかを判断することはできないし、する必要も無い。心的距離があやふやな中でナルを使うことは、心的距離が近いことを意味しかねず、対象との間、ひいては会話の参与者全員に誤解を生む恐れがあり、またそもそも心的距離が定まらない上では待遇表現を用いることもできない。適切な視点が定まらない=心的距離が定まらないことから、ここでは、待遇表現の一種であるナルを使用することができないのである。つまり、友人・知人と比した際、他人には、ナルが使えない、非使用とならざるをえないのである。ここからも、ナルは3種の判断による3種の意識により使い分けられていると言えるだろう。

5. 3. 可視性によるナルの積極的使用

5. 2. では、ナルが3種の判断による3種の意識を明示し、それぞれ、[家族・選択的不使用/友人・知人・使用/他人・非使用]となると述べた。しかし 4. で述べたように、対象が見えない場合にこの使い分けは異なる様相を示す。では、なぜ対象が見える/見えないという違いでナルの使われ方が異なるのか。それは見えない=不可視というものが意味する事実にある。

可視・不可視という状況を物理的距離に還元すれば、[可視=近い/不可視=遠い]ことになる。ここで、心的距離と物理的距離の関係について考えたい。ここまで述べてきたように、家族間では心的距離がほぼ無く、また家族は物理的距離でも極めて近い存在である。家族における心的距離と物理的距離は、ほぼ等しいものとなる。また、一般的にある対象を友人・知人のように心的距離が近い存在だと判断するに至るまでには、ある程度物理的距離が近い期間を経ているものである。つまり、物理的距離と心的距離は、不可分とは言わないまでも、その大きさが似通っている場合が多い。当該方言のナルの使い分けが不可視の状況下で異なる理由は、この2種の距離が相通じ、心的距離の判断・表示に物理的距離が介在し、[可視=心的距離が近い/不可視=心的距離が遠い]との判断がなされていることにあると言える。4. でも触れたが、当該方言では対象が見える範囲で離れている=距離があっても可視の場合と、対象が見えないほどに離れている=不可視の場合でナルの使い分けが異なる。そもそも、可視は物理的距離の近さに、不可視は物理的距離の遠さに還元できると先に述べた。その物理的距離の大小=可視性により、心的距離を表すナルの使い分けが異なることこそが、当該方言において、心的距離と物理的距離が関連のあるものとして捉えられ、[可視=心的距離が近い/不可視=心的距離が遠い]、つまり可視性で心的距離が判断されていることを示している。

以上のことを踏まえ、ナルの使い分けが可視性によって異なってくる理由を詳細に見ていこう。4. より、不可視の場合にナルの使用が変化する対象は、目上の家族だけであることがわかる。本来物理的距離がほぼ無いはずのこの対象が不可視となることで、そこに心的距離があるかのような感覚が生まれる。意図せずして生まれてしまったこの心的距離を、何とかして言

葉の上だけでも近付けて、現在の状況(不可視=心的距離あり)と、本来の対象との関係の実態(家族=心的距離ほぼ無し)の間にある溝を埋めることはできないものか。そのような作用が働き、ここでは心的距離の近さを積極的に表示するためにナルが使用されていると考えられる。そもそも[ナルの無]は、選択的不使用と非使用という全く異なる2つの使い分けを示し、一方は心的距離がほぼ無く、一方は心的距離がある・定まらないことを示している。この[ナルの無]の二面性が、不可視の状況で音声のみを頼りにその事象を受けとった場合、極論を言えば話し手の意図とは正反対の意図で、対象及び会話の参加者がそこに含まれている意識を解釈してしまう危険性を生んでいる。全く異なった意図で誤解されるよりは、せめて「近い」と受け止めてもらいたい、本当は心的距離を表示したくはないが、受け取り方によって遠さを感じさせてしまうよりは、心的距離があることを表示してしまうことになったとしても、近さを感じさせる方がまだ好ましい。そのような意識の表れでもあるだろう。5. 2. では「近い」と表示することが心的距離を生んでしまうため、家族間でのナルは選択的不使用となると述べた。この場合の対象は可視なので、[状況=心的距離ほぼ無し・実態=心的距離ほぼ無し]と、状況と実態が同一であり、そこに心的距離を持ち込まないようにあえてナルを使わない=選択的不使用となる。だが不可視の場合は、[状況=心的距離あり・実態=心的距離ほぼ無し]と、状況と実態が乖離している。そのような場で、なんとか状況を実態に近付けようとして、この場合は積極的にナルを使い(ナルの積極的使用)、近いことを表示するのである。本段で述べたことと5. 2. で述べたことは、一見すると矛盾しているように見えるが、どちらも対象との間にある実態を忠実に表すために話し手が行う配慮なのである。そして、そのように一見矛盾したような配慮になってしまう原因は、[ナルの無]が有する相反する2つの意図と、当該方言における心的距離と物理的距離の結びつきによる。

ここまで、ナルの使い分けについて論を重ねてきたが、その根幹にあるのは「よそよそしさを出したくない」という話し手の意識であろう。待遇表現を使用する上で避けられないこの問題を、いかに回避するかという配慮が、[ナルの有/無]という、言葉としては2種類の事象しか持ち合わせていないナルに、ここまで複雑な使い分けをさせるのだと考えられる。

6. まとめと今後の展望

本稿において、ナルは[ナルの有/無]という2種の事象で、対象に対する親密度による3種の判断を表しているとし、また実際に現れるのは2種の事象であるが、[ナルの無]は正反対の2つの意識の表示を負っているため、その意識と判断による使い分けを正確に表示するならば、[家族-選択的不使用/友人・知人-使用/他人-非使用]となると論じた。さらに、ナルは可視性によっても使い分けられ、対象が不可視である場合の現れ方が可視の場合とは異なることを示した。またそれは、不可視という状況が心的距離があることと相通じてしまうため、通常家族間に用いられないナルが、対象が不可視の場合には、実態により近付けるために積極的に使用されるからだと論じた。そして、そもそも家族という最も親密度が高いだろう対象に、ナルの選択的不使用・ナルの積極的使用という一見矛盾した方法で配慮を示さなければならないのは、当該方言において、[ナルの無]が1種の事象で全く相容れない2種の意識を表示していることと、心的距離と物理的距離が密接な関係にあることからだとした。

そもそも、待遇表現は距離化の表現であり、その心的距離は、視点を定めることで生じるも

のだと 5. 1. で確認した。視点、つまり、対象をどのように見るかということが、待遇表現の出発点であり、またそれゆえ「見る」ことと心的距離は不可分であるだろう。心的距離の有無・大小で待遇表現を論じることができるならば、その心的距離を判断する際の基準である「見る」という行為、ひいては可視性(可視/不可視)で待遇表現を捉えていくことも可能だと発表者は考える。本発表は、松江市方言というごく限られた場所で使われている日本語の一側面から論じているものであるが、5. 1. で見たように、そもそも日本語の待遇表現が距離を基にした表現である限り、当該方言のみならず、日本語の様々な側面において、この可視性による議論・検討を行うことが可能であり、また有用となるのではないだろうか。

参考文献

- 神部宏泰(1982)「7 島根県の方言」『講座方言学 中国四国地方の方言』国書刊行会
- 滝浦真人(2005)「〈視点〉と〈距離〉の敬語論 —日本語敬語の語用論的記述理論のために—」(麗澤大学大学院言語教育研究科論集『言語と文明』第3巻)
- 千葉軒士(2009)「島根県松江市方言の待遇表現について」(名古屋・方言研究会会報第25号)
- 丹羽一彌(1982)「第2章 稲沢市方言の構造」『新修 稲沢市史 研究編六 社会生活 下』新修稲沢市史編纂会
- 広戸惇(1950)『山陰方言の研究』島根県立教育研究所

本稿は日本方言研究会 2009 年度第 88・89 回合同研究発表会における口頭発表を加筆修正したものである。発表に際し、貴重なご指摘・ご教示を賜りました先生方に感謝申し上げます。